

もも・ネクタリン特報

生育はほぼ平年よりもやや遅れている状況です。今後の天候により生育は左右されますので、防除並びに管理作業は適期に実施しましょう。

また、結実確保のため花粉のない品種を中心に人工授粉を実施しましょう。病虫害では、せん孔細菌病の発生が心配されます。せん孔細菌病防除は、梅雨明けまでが重要防除時期となりますので、当面は散布間隔7～10日を厳守し、併せて春型枝病斑の除去を実施しましょう。

【開花状況】白鳳（調査地点：平岡） *参考 日野地区 開花4/18

年度	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	平年
開花	4/15	4/24	4/28	4/17	4/20	4/13	4/23	4/28	4/26	4/18	4/23	4/22

地域・品種によって生育差がありますので、園地の生育状況をよく確認しましょう！

第3回 定期防除

散布が遅れるとせん孔細菌病やモモハモグリガの発生を招くので適期に散布する

⇒収穫前や収穫中の作物への飛散に十分注意してください。訪花昆虫保護のため早朝散布とする。

(せん孔細菌病対策として、6月上旬の防除まで散布間隔7～10日を厳守する)

もも

・ ・ 散布時期：落花後（4月30日～5月6日頃）

散布薬剤： 水	100%		
展着剤	10ml		
フェニックスフロアブル	25ml	(前日、2回)	
トレノックスフロアブル	200ml	(7日前、5回)	
アグレプト水和剤	100g	(60日前、2回)	

散布日	月	日
散布量		リットル

対象病虫害：せん孔細菌病、黒星病、灰星病、モモハモグリガ、ハマキムシ類、(コスカシバ)

10a 当り散布量： 350%

【注意事項】

- ①アグレプト水和剤は、ぶどうにかかると種無し果を生じるので隣接園は注意する。
- ②アブラムシ類の発生が見られる場合は、ウララDFの2,000倍(14日前、2回)を加用散布する。
- ③アグレプト水和剤に代えて、ストマイ液剤20の1,000倍(60日前、2回)でもよい。

ネクタリン

・ ・ 散布時期：落花後（4月29日～5月5日頃）

散布薬剤： 水	100%		
展着剤	10ml		
フェニックスフロアブル	25ml	(前日、2回)	
トレノックスフロアブル	200ml	(30日前、5回)	
マイコシールド	66g	(28日前、5回)	

散布日	月	日
散布量		リットル

対象病虫害：せん孔細菌病、黒星病、灰星病、モモハモグリガ、ハマキムシ類、(コスカシバ)

10a 当り散布量： 350%

【注意事項】 もも・ネクタリン混植園では、ネクタリンの防除を行なう

- ①アグレプト水和剤はネクタリンに登録がないため使用しない。
- ②アブラムシ類の発生が見られる場合は、ウララDFの2,000倍(7日前、2回)を加用散布する。

裏面もご覧ください

今後の栽培管理

人工受粉：花粉が少ない品種や全くない品種は、人工受粉を行なってください。あらかじめ採花し開葯した花粉で受粉することが最良ですが、受粉樹(花粉の多い品種)で開花している花の花粉を毛バタキ等につけて受粉(相互交配)するのも効果的です。

人工受粉のポイント

☆主力の川中島白桃等は花粉が少ないため、人工受粉が必要です。

- ・実施する時は、花粉の多い白鳳系・あかつき・なつっこ等の品種を利用しましょう。
- ・もも類は開花後4～5日頃までの受精能力が高いです。
- ・早く咲いた花ほど結実も良く果実肥大も良いので、受粉適期は1樹のうち60～70%開花した時期です。
(遅れて咲いた花に結実した果実ほど小玉になり易い傾向)
- ・柱頭が褐色となり光沢がなくなれば、受精能力は著しく低下したと判断します。(開花後期)
- ・10a 当り必要な花粉を取るには約800～1000gの花を採花する必要があります。

もも貯蔵花粉の受付

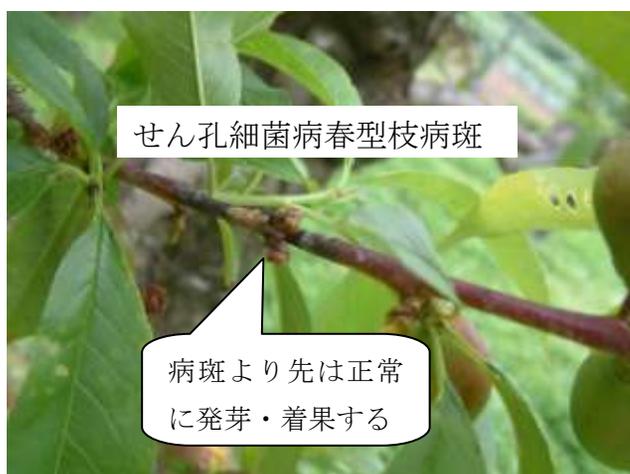
天候状態により開花・満開が極端に進み当用花粉では間に合わない場合や、凍害に遭遇した場合は、花粉のある品種でも人工受粉が必要となる可能性がありますので、ぜひ桃花粉の貯蔵をおすすめします。

- ・共同開葯所(ぶどうセンター内)では、次年度に使用するための貯蔵花粉の受付を行ないます。
- ・花の持ち込みの際に貯蔵花粉と明記し、各支部の指示に従い搬入してください。
- ・採取する花は、白鳳・あかつき・なつっこ・白根白桃など花粉の多い品種としましょう。
- ・ももの普通貯蔵花粉発芽率は50～60%であり、使用に際しての問題はありません。

枝の誘引：発生角度が鋭角すぎる側枝・垂主枝・主枝の誘引。樹形改善のために誘引は必須です。

せん孔細菌病春型枝病斑を除去しよう！

せん孔細菌病発生園では、多発地帯を中心に枝病斑の除去が必須作業となります。せん孔細菌病の春型枝病斑は開花期から確認されます。春型枝病斑をそのまま放置しておくと、感染拡大につながります。春季に感染源となる春型枝病斑の除去することで、夏季の果実感染が軽減されます。



【写真：せん孔細菌病春型枝病斑】



【写真：春型枝病斑 (上)、枝の先枯れ(下)】

せん孔細菌病春型枝病斑のポイント

- ① 開花期ごろから一年枝の芽に黒褐色の病斑ができる
- ② 風雨により感染が拡大するので、園地の中でも風当たりの強いところに発生しやすい
- ③ 低い場所で病斑が確認されたときは、上部にも病斑があることが多い
- ④ 栽培期間を通して感染し、果実の発病まで1ヶ月くらいかかる